

平成22年度資源評価票(ダイジェスト版)

標準和名 ハタハタ

学名 *Arctoscopus japonicus*

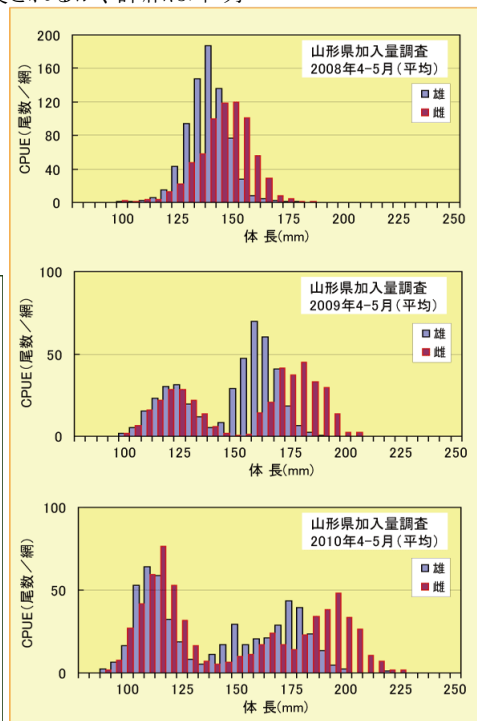
系群名 日本海北部系群

担当水研 日本海区水産研究所



生物学的特性

寿命: 5歳(年齢は、ふ化した年を基準に暦年で示す)
成熟開始年齢: 雄:1歳(100%)、雌:2歳(100%)
産卵期・産卵場: 12月の極短い一時期、沿岸の藻場、秋田県での産卵が多い
索餌期・索餌場: 未成魚期以降の分布と回遊に関する知見は少ない
食性: 端脚類、橈脚類、オキアミ類、イカ類、魚類
捕食者: 大型魚類によって捕食されるが、詳細は不明

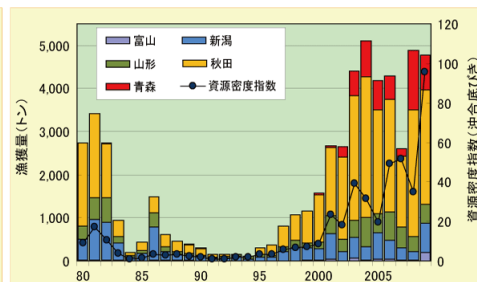
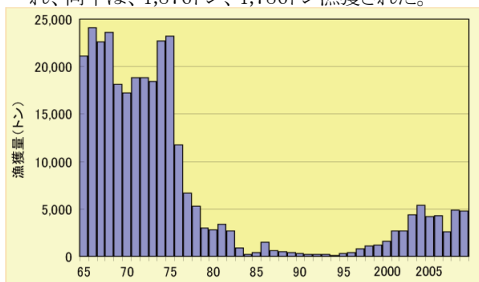


漁業の特徴

日本海北部のハタハタは秋田県での漁獲が多く、産卵・接岸期を対象とした定置網と刺し網(沿岸漁)による漁獲割合が大きい。また、ほぼ全域において小型底びき網や沖合底びき網によって漁獲される。

漁獲の動向

日本海北部のハタハタの漁獲は1970年前後には20,000トン程度の高水準にあったが、1976年以降激減し、1991年には158トンにまで落ち込んだ。秋田県は1992年の9月から3年間採捕禁止を実施し、その後も青森～新潟の各県で自主的・公的な漁獲規制を実施している。近年は増加傾向であり、2008年、2009年は、卓越した2006年級に支えられ、両年は、4,876トン、4,786トン漁獲された。



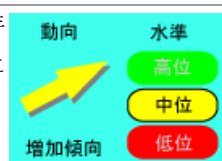
資源評価法

漁獲量の推移とともに、沖合底びき網漁業(沖底)漁獲成績報告書に基づく漁場別漁獲統計を解析し、1980年以降の資源密度指数*の推移を調べた。加えて、青森県、秋田県、山形県および新潟県の市場調査及び加入量調査における体長組成から、近年の漁獲物の年齢構成と加入状況を考察した。*資源密度指数:10分マス目で設定された漁区ごとの月別CPUE(漁獲重量(kg)/ひき網回数)を一定期間(年または月)、ある海域内(中海区または小海区)で集計した値を有漁漁区数で除したものである。

資源状態

近年の漁獲動向から、1990年代前半に比べ明らかに回復している。2003年以降、2007年以外の年は、4,000トン以上漁獲された。沖底の資源密度指数は、2003年以降、増加傾向にあり、2006、2007年はそれまでの最高値を示し、2008年は低下したものの、2009年には2006、2007年よりもさらに高い1980年以降の最高値を示した。資源の動向は増加とし、その水準は近年比較的高いが、1970年代の多獲期には及ばないことから中位と判断する。

管理方策



漁獲量は2007年に減少したが、2008年、2009年ともに、2006年級に支えられ、5,000トン近くであった。平均的には2003年以降中位水準を維持している。2010年の主体であるはずの2007年級(3歳)は低調であるが、2008年級(2歳)は漁獲加入し始めた。2010年に1歳、2011年には2歳となる2009年級の豊度はかなり高いと考えられ、2011年は2、3歳を主体とした漁獲が期待される。現状の漁獲圧のもとで、漁獲動向を見守ることが重要である。

	2011年漁獲量	管理基準	F値	漁獲割合
ABClimit	4,800トン	1.0Cave2-yr	—	—
ABCTarget	3,900トン	0.8・1.0Cave2-yr	—	—

- 100トン未満を四捨五入

資源評価のまとめ

- 漁獲量は、漁獲に関する自主的・公的規制のもとで、増加傾向にある
- 大きな年変動はあるものの、2003年以降中位水準を維持し、かつ、近年、とくに増加傾向が顕著である
- 2011年は豊度の高い2009年級(2歳魚)が漁獲の主体である

管理方策のまとめ

- 現状の漁獲圧のもとで、漁獲動向を見守るべき
- 網目拡大を継続的に呼びかけ、2009年級を有効に利用することが重要
- 水産庁では2003年7月に「資源回復計画」を作成

執筆者: 藤原邦浩・後藤常夫

資源評価は毎年更新されます。